



# ありがとう愛輪号

～ひとつの取り組みにピリオドがうたれる～



## ☆はじめに☆

新たな活動を始めるには、大きなエネルギーが必要です。不安や期待を感じながらも、わくわくするものです。しかし、今回の春号特集は、ひとつの活動にピリオドが打たれる話です。

静岡県ボランティア協会の歴史の中で、1977年(昭和52)から45年間に渡り、移動支援としてリフトバス愛輪号の運行をしてきました。この取り組みが、2023年(令和5)3月をもって、社会的使命とその役割を果たし終了しました。淋しさを感じますが、記憶と記録に留めたいと考え、今号の特集としてお届けします。「ありがとう愛輪号!」と、心からの感謝を込めて。

## ☆当時の時代背景☆

いまから46年も前のこと。本協会が誕生した1977年(昭和52)当時は、どのような時代だったでしょうか。例えば、車椅子で生活する人たちが、外出しようとしても移動する手段としてリフト付きバスやワゴン車などは、県内に複数存在していたかと言えば、まだ本当に数少なかったと思われま

「静岡県車椅子友の会」という団体は、「重度障害者が相互の親睦を計りながら、互いに助け合い励ましあい困難を克服し、社会復帰を促進し豊かな福祉社会の建設に勤めること」を目的として発足しています。当然のことながら、本協会は車椅子友の会の活動を全面的に応援するスタンスで、当時の活動に関わっていました。モーターゼーションが普及する一方で、交通事故も急増していた時代でした。不幸にして、交通事故や病気等により運動機能を失い、車椅子での生活をしなければならぬ人たちがいました。車椅子の人たちにもっと光があたるようにという積極的な活動が取り组まれました。当時、リフト付きの車両があることは分かっているても、身近で気軽に利用できる環境ではありませんでした。車椅子障害者の自立や社会参加という言葉すらなく、地域の中で孤立して生活することも普通でした。市役所にも車椅子が入れるトイレが設置されていない環境です。街中がバリアだらけの状態だったわけです。

## ☆SBSラジオキャンペーン☆

「車椅子の人々を太陽に」SBS静

岡放送開局25周年のリフトバス募金へは、八代英太参議院議員を迎えて、1日午前8時から2日午前9時までの2時間ぶつ通のラジオ生放送で県民に善意の寄付を呼びかけた。(中略) 身障者に温かな愛の手を…の運動が、国民の間に高まってきた矢先のキャンペーンだけに、リフトバス募金に県民の関心が集まり、2日午前9時の締め切りまでに寄せられた募金額は、1,033万2,818円と、1千万円を突破の好結果を収めて終了した。同日午前8時半から静岡新聞放送会館前で行われた終了式には、車椅子の人たちや、同運動関係者を前に、大石益光SBS社長が県民の善意に感謝を述べ、八代さんも、ほんとうに涙の出る思いです。この真心にこたえて懸命に生き抜きましょうと決意を語り、県下の秋を善意で包んだ募金キャンペーンの幕を閉じた。(1977年11月2日静岡新聞より転載)

この時に寄せられた募金をもとにリフトバス愛輪号が誕生します。いわゆるマイクロバスタypesの愛輪1号とワゴン車タイプの愛輪2号、同3号の3台が本協会に寄付されました。そして、このリフト付き車両を運行するため、大型免許を持つ人に、運転ボランティア

アとして活動いただけるようボランティア登録が始まります。こうして誕生した愛輪号と運転ボランティアの協力により、移動障害のある人たちを応援する愛輪号の運行活動が始まったわけです。3台のうち、リフト付きのワゴン車タイプの愛輪2号と3号は、浜松市社会福祉協議会と沼津市社会福祉協議会にそれぞれ預かっていただくことになり、運転ボランティアの登録で、地域で移動障害のある人たちを応援する活動に活用されていきました。



### ☆再びのキャンペーン☆

初代リフトバス愛輪号は、10年間走り続けました。当然、老朽化も進むことになりました。2代目のリフトバス愛輪号が欲しいという話が出てくる中、静岡新聞・静岡放送が、再度「SSBSリフトバスキャンペーン」を実施してください、初代愛輪号よりもひと回り大きい35人乗りの大型リフトバスが、1987年（昭和61）3月に誕生することになりました。2度のリフトバスキャンペーンをしていただき、移動障害のある人たちを応援するためリフトバスを寄贈いただいたことは、車椅子友の会の皆さんをはじめ、本協会にとっても大変に喜ばしく大きな出来事として受け止められました。

ラジオキャンペーンで誕生した、リフトバス愛輪号は、運転ボランティアの人たちの協力で支えられ、無事故でこの20年間、運行活動が行われました。当時、静岡県車椅子友の会の会員、故芳賀収作さんがこんな文章を残していました。

リフトといえば、ひと昔前の作業用のフォークリフトを思い出されてならない。しかし、世の中は便利にな

ったもので「リフト」と言えば「リフトバス」をさすようになった。福祉活動にはなくてはならない用具のひとつだ。県ボラ協に現在あるリフトバスは二代目。初代に比べ大きく二代目は大型35人乗り、ゆったりとしていて乗り心地もよい。各福祉団体でも大いに活用してもらいたいものだ。（「笑顔は天の花」静岡県ボランティア協会10周年史より抜粋）

### ☆リフトバスの運転者も養成☆

35人乗りの大型リフトバスは、ボランティアの人たちの協力で運行してきました。運転者を養成するために、静岡市内の古庄自動車学校の協力を得て、ボランティアの運転適性検査や実際の運転技術を自動車学校の教官立ち合いのもとで実施することができました。

運転ボランティアさんには、少々緊張する場面だったと思いますが、自動車の教官の立場から率直な意見をもらい、運転ボランティアの方々にさまざまなアドバイスをいただきました。こうした客観的な指導を得たことで、

本協会ならびに運転ボランティア自身も慎重な運転を心掛けることの大切さを意識できました。また、運転者には

### ☆ふじのくに愛輪号登場☆

静岡新聞・静岡放送のラジオキャンペーンで導入された大型リフトバス愛輪号の後継車を考える段階になった時、静岡県への要望も上がり、その結果、県費で大型リフトバスが順次購入されることになりました。ふじのくに愛輪

1号は、1997年（平成9）3月12日に、また、同2号は、2000年（平成12）6月13日に登録、これより2台体制での運行が行われました。



平成15年度、今から20年前の事業報告を確認すると、ふじのくに愛輪1号・2号の合計として、年間で150回運行され、運行日数は168日、延べ4,427人の方々にご利用いただきました。運転ボランティアは、延べ330人が関わってくれていました。この数字はある意味では驚異的でした。ふじのくに愛輪号2台体制で運行をしていた頃は、運転ボランティアさんの確保をどのように行うことができるのか、事務局も気苦労が絶えない状況が続いていました。もちろん、無事故での運行は続いていました。

☆役割を果たしつつ☆

愛輪号2台体制で運行していくなかでも、利用件数は徐々に減少傾向になっていきますが、愛輪号を利用していただいた利用団体は、どのような感想をもたれていたのでしょうか。平成20年当時の利用記録から利用団体の声を少し拾ってみました。

\*運転ボランティアの皆さんは、いつも明るくてテキパキしていて本当に頼もしく、気を使わなくてよく、ほっとした家族のようにあ

たたかく、嬉しかったです。

\*今回も車椅子の乗降やバスの停車位置など本当に細かく配慮いただき感謝しています。障害の子どもでバスの乗り降りに時間がかかったりしても優しくしてください、いろいろと不手際もありましたのに、うまく対応して下さって、申し訳ないやらありがたいやらで、運転ボランティアさんには心から感謝しています。障害の子はもちろん親も本当に楽しみにしていますので、これからもよろしくお願ひします。

\*運転ボランティアの方はお二人ともとても親切で、参加者全員楽しく過ごさせていただきました。



運転ボランティアさんが、慎重な運転を心掛け、利用者、利用団体に細やかな配慮をしていただき運行してくれていた様子がよく伝わってきました。

平成9年3月に初期登録した愛輪1号は、平成22年3月運行開始から13年が経過したところで運行を終了し、その後は、愛輪2号1台体制で、令和5年3月まで運行が続けられてきました。近年、福祉施設や団体等でリフトバスを利用して外出する機会は大きく減少してきていました。さらにこの3年間は、コロナ禍により利用回数は、年間1〜2件程度に留まるところまでできています。

☆45年を振り返り☆

今年3月まで運行していた、愛輪2号(初期登録 平成12年6月)は、23年間リフトバス運行事業を支えてくれました。車体の老朽化、利用件数の激減、運転ボランティアさんの高齢化と減少を大きな要因と考え、2023年(令和5)3月末日をもって運行事業を終了することを、協会の理事会においても結論を出させてもらいました。

3月21日、愛輪号感謝の集いを開催し、運転ボランティアさんによるラストラン、愛輪号の清掃、参加者みんなで愛輪号に感謝する時間となりました。利用団体の皆さんからは、活動終了を惜しむ声も伺っています。時代の流れのなかで、45年間を通し愛輪号の運行事業は、一つの役割を果たすことができたのではないかと考えています。

安全運行を支えていただきました。運転ボランティアの皆さま、愛輪号の駐車を長期間にわたり無償提供いただきました浜名梱包株式会社様、日常的な愛輪号管理にご尽力を賜りました大西和博様に心よりお礼を申し上げます。皆さま、本当に長期間、ありがとうございました。



# 地域共生フォーラム

開催報告

～みんなが笑顔になれる社会がいいよね～



静岡県ボランティア協会では、(福)静岡県共同募金会が取り組む「課題解決プロジェクト募金」に参加し、若い世代の方々とともに地域社会が抱える福祉課題を学ぶ機会を作りたいと呼びかけました。67件の個人団体の皆さまから応援をいただき、令和5年2月23日に「地域共生フォーラム」をみんなが笑顔になれる社会がいいよね」を開催しました。

フォーラムの前半では、高齢の母親と自閉症を抱えた息子が社会の中で生きていく様を描いた映画『梅切らぬバカ』を上映しました。鑑賞後は、40名の参加者が8つのグループに分かれ、コミュニケーションツール「えんたくん」を活用して、映画の感想や自分が考える『共生』について活発に意見交換をしました。その中で多くの方からでてきたのが「知る」「理解する」というワードでした。



フォーラムの後半では、共生社会への第一歩となる「知る」「理解する」をより深めるために、お

二人のゲストからお話を伺いました。お一人目のゲストは、(特非)ひまわり事業団の静岡障害者自立生活センター当事者スタッフとして働く杉山元太さんです。重度訪問介護サービスやガイドヘルパーを利用しての一人暮らし生活を、ご自身が配信するYouTube動画も交えて紹介いただきました。



動画から、車いすユーザーが入居できるバリアフリーのご自宅(市営住宅)の様子や、大好きなサッカー観戦におかう中で、たった2cmの段差が車椅子では乗り越えられないことなど、気づけなかった問題点を知ることができました。杉山さんは、SNSを利用して自身の日常生活を発信することで、「知る」機会を作りだし、「理解者を増やす」ことに積極的に取り組んでいます。

お二人目のゲストは、特別養護老人ホーム竜爪園でコミュニケーションソーシャルワーカーとして働く三嶽順也さんです。地域の子どもた

ちの支援に関わるなかで、子どもへの貧困から共生社会について考えるお話を伺いました。「子どもの貧困」という言葉で頭に浮かぶのは『絶対的貧困』と呼ばれる「食事が満足に取れない」「服が買えない」という物理的な問題ですが、最近では、最低限度の生活は維持できるが、「塾に行けない」「旅行や娯楽にお金がかげられない」ためにさまざまな生活体験が経験できない『相対的貧困』と呼ばれる体験の貧困が増えていそうです。体験の差は子どもの選択肢を狭めます。体験や経験すること子どもたちの自己選択や自己決定の機会を増やしたいと三嶽さんは話され



誰しも「知らないこと」「わからないこと」には不安や恐怖を抱きます。共生社会は、お互いに知り合うこと、理解し合うことから始まります。自分にできることを見つけるヒントがたくさんあった時間でした。

\* \* \* \* \*